

ユーロ圏銀行のストレステスト(健全性審査)とユーロの推移

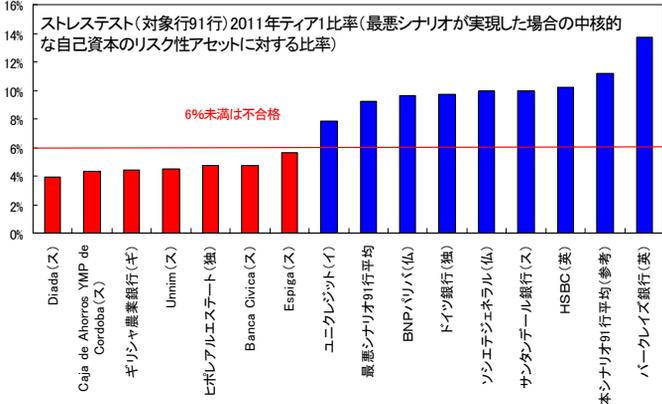
- ✓ ストレステストは、ある程度の不透明感の払拭につながり、目先のユーロ安圧力は後退。
- ✓ ユーロ・米国間の2年国債金利差は約4ヶ月振りにユーロをサポートする要因に転じた。

7月23日に発表された最悪シナリオ(景気後退+ソブリンショック:国債の価格下落)をベースにしたストレステストは、対象銀行91行のうち、7行が不合格となり、合計35億ユーロの資本増強が必要とされました(図表①)。市場の予想(20行弱が不合格・300億~1,000億ユーロ弱の資本増強要す)よりも良好な結果であり、市場参加者はある程度、好意的に受け止めた模様です。実際、ストレステスト発表後の欧州銀行金融サービス指数は急上昇しており、ユーロも連動しています(図表②)。

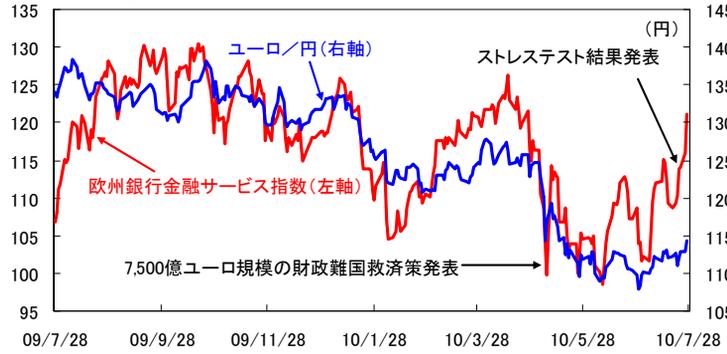
ストレステストの結果については、足許の欧州経済指標の改善によって景気悲観論が後退し始めていた事に助けられた面も大きく、内容に関しては様々な見方があります。銀行の情報開示により、ある程度の透明性が確保された点は共通して評価されていますが、今後の景気動向次第という点も否めないところです。

【図表①】

※(ス)→スペイン、(ギ)→ギリシャ、(独)→ドイツ、(イ)→イタリア、(英)→イギリス、(仏)→フランス



【図表②】



ユーロ圏金融機関の社債のデフォルト(債務不履行)に対する保証コスト指数(保険料の一種)は、ストレステストの結果を好意的に受け止め、これに連れユーロ/円も上昇しています(図表③)。

【図表③】

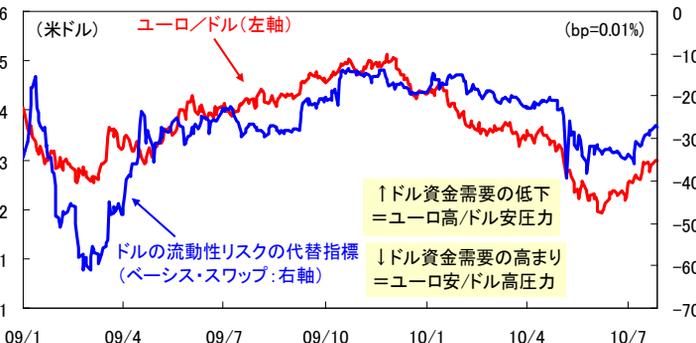


ユーロ圏と米国の2年国債金利差が、約4ヶ月振りにユーロ圏優位に転じたこともユーロのサポート要因として挙げられます(図表⑤)。

【図表⑤】

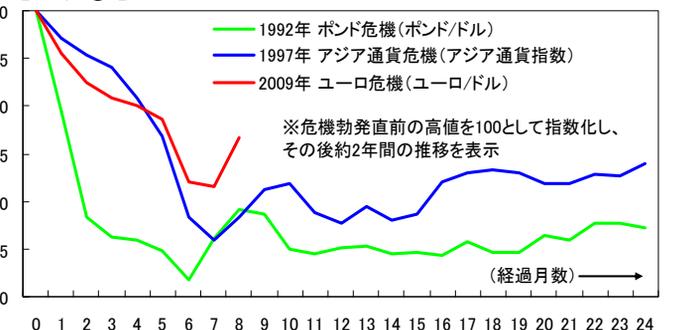


【図表④】



相場にはアノマリー(相場のクセのようなもの)と呼ばれるものがあります。過去の代表的な通貨危機の暴落期間は約5~8ヶ月程度ですが、今回のユーロ通貨危機も7ヶ月の暴落期間を経て、反発しました。過去のアノマリーを今回も踏襲し今後も推移するのか要注目です(図表⑥)。

【図表⑥】



出所: 図表①はCEBS(欧州銀行監督者委員会)、その他はブルームバーグのデータを基にニッセイアセットマネジメント作成

当資料は市場環境に関する情報の提供を目的としてニッセイアセットマネジメントが作成したものであり、特定の有価証券等の勧誘を目的とするものではありません。当資料は信頼できると考えられる情報に基づいて作成しておりますが、情報の正確性、完全性を保証するものではありません。当資料のグラフ・数値等はあくまでも過去の実績であり、将来の投資収益を示唆あるいは保証するものではありません。また税金・手数料等を考慮していませんので、実質的な投資成果を示すものではありません。当資料のいかなる内容も、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。 <審査確認番号H22-TB84>